# 潟語り（かたかたり）（三十三）

## 潟船保存会　その一

文・小西一三
絵・小西由紀子

大崎の三浦新七さんは昭和24年生まれ。干拓前の潟の広大な風景を知り、きれいな潟で遊んだ最後の世代かも知れません。潟船保存会の会員である三浦さんに、潟への想い、会の活動などについて語っていただきました。

### 昔の潟の姿を伝え、潟の原風景も復活させたい

私の家は代々、潟の漁師。親父が確か9代目と聞いているので、もし私が漁師をやっていれば10代目。畑や田んぼの広がる今の風景からは想像もできないでしょうけど、この家から300メートルも歩けば潟。小さい頃から潟が遊び場で、小学生のころは親父の船に兄弟で乗っていろいろな漁の手伝いもしてました。

親父は干拓が始まってから漁を止め、私も高校を出てから公務員になりました。15年ほど前、小屋を壊して家を建てることになったのですが、小屋の2階には漁で使った昔の漁具がぎっしり積まれていました。もう誰も使う人がいないので捨てようと思いましたが、親父やその前のじいさんが大切に使っていたことを思うと、捨てるに捨てられない。ちょうどその頃、天王町史談会が天王町や八郎潟周辺に残っている潟船や漁撈用具などを集めて文化遺産として後世に伝えていこうという活動を始めていました。私の家の漁撈用具も運よく引き取ってもらい、公民館などに保管してもらいました。

天王町史談会を母体とした潟船保存会が発足したのは平成7年4月。私の家は代々、潟の恵みで生活させてもらってきたし、私自身も潟に育ててもらったと思っていたので、私にお手伝いできることがあればと会員に加えてもらいました。現在の会長は天王の石川久悦さん、天野荘平さんと私で事務局を担当しています。転勤で県内あちこちを回りましたが、どこにいても、時々、干拓前の潟の景色が思い出されたものです。私の子どもの頃は岸辺一面の葦原で、水もきれい。今の若い人に話してもなかなか信じてもらえませんが、遊びながら潟の水を普通に飲んでいたものです。こんな昔の潟の様子を伝えていくのも会の活動の一つです。